

同神期報

同志社大学神学部・大学院神学研究科

<https://theo.doshisha.ac.jp/>

第99号

2023年3月20日発行(創刊1923年)

発行人:小原 克博

編集者:村山 盛章、中野 泰治、三輪 地塩

発行所:〒602-8580

京都市上京区 今出川通烏丸東入
同志社大学神学部

退職にあたって

石川 立



1996年春、同志社に入社(神学部に入部)しましたので、この春で「勤続」27年になります。以前誇っていた学生最長不倒期間(大学と大学院合わせて約24年間)を越えました。この間、娘と息子はだいたい(完全ではなく)独立し、それに比例して私も当然ながら年を重ね、いよいよ古稀に達するに至りました。

小さい頃から学校嫌いだっただけが、学校という組織の中に四半世紀余も居続けることができたのは、皆さんのお陰だと思っています。この場をお借りして感謝申し上げます。

入社当時の同志社大学はのんびりした比較的小さな大学だったように思います。学部の数も少なかったし、教職員も多くなかったと記憶しています。その同志社も、文科省の旗振りのもと、大学生生き残りの競争に巻き込まれざるをえなくなりました。これが時代の流れというものなのかもしれませんが、私自身は田舎の出であり、

競争のほとんどないところで育ったので、生き馬の目を抜くような大学間競争にはいまだに馴染むことができません。このあたりでフィールドから退場するのは、監督の采配、いや、神の配剤といったところでしょうか。

退職後は何をするのかとよく訊かれます。何か特定の仕事を新たに始めることはありません。でも、ポーっと生きてはチョコちゃんに叱られます。小学生の頃、夏休みは時間の使い方が自由なので、宿題を放ったらかして休み中遊びほうけ、8月31日になって、青い顔して40日分の宿題に取り組んだものです。そんな小学生のようにならないため、一日を適度に自己管理しなければなりません(これが難しい)。

この数年来、依頼されているのに、手をつけることのできなかった詩編注解の仕事が眼前に大きくあります。これにまず本格的に向かいます。これまでに読みたなくても時間のとれなかった本も沢山あります。もう一度ゆっくり読み返したい本も少なくありません。これら古今東西の、神学、哲学、文学等々の本を読みたい。幸い意欲は減退していませんが、一人で読むのもつまらないので、元学生の皆さんに付き合ってもらい、ゆったりとした演習の時間をもちたい。コロナ禍が教えてくれたZoomの利便性に依存もしながら、知の時間を共有したいと考えています。もちろん、文字を追うだけではなく、小学生のようにいろいろな経験をし、与えられた生ののびのびと楽しみたいと思います(できるかな?)。

最後になりましたが、皆さんのご多幸を心よりお祈りしております。

退職にあたりまして

四戸 潤弥



最初に、神学部の先生方、事務のスタッフの方々、および学生の方々に深くお礼申し上げます。キリスト教主義に基づく良心教育を基本とした同志社大学、そして、その核心である神学部で、同じ一神教であるイスラームを信仰学の立場から研究することができました。イスラームでは、アラビア語啓示のクルアーンを継承するためにアラビア語文学が発達し、また、その上にイスラーム世界の歴史があるため、宗教からの他、言語、法学、動向情勢分析学、各国史とその事情、民俗学、そして、ジェンダー学などの面から多角的、多面的な研究アプローチがなされてきましたが、信仰学、あるいはクルアーン・テキスト学の面からのアプローチは弱く、今も大きく変わっていません。同志社大学学生の中には、両親、あるいは親のどちらかがムスリム(イスラーム教徒)である学生や、ムスリムの外国人留学生も増え、大学HPにもその姿が現れるようになってきたことは大きな変化の一つです。担当はイスラーム法理学、イスラーム法、アラビア語文法ですが、日本のイスラーム、中東研究でも神学部が特色ある存在になるように図書

集め、特にアラビア語諸方言はアップデートに心がけました。2001年以降の欧米のイスラーム原典英訳書籍や研究書も充実しています。サウジアラビア政府招待留学も支援し、日本でのイスラーム、中東研究で気になる学部になっていると思います。

2004年と5年の二度、大学院生と学部学生を引率してシリア国内旅行に行きましたが、二度目に、シリア一周の旅程で、ユーフラテス川、南部のギリシャ、ローマ遺跡を訪問したことが、とても印象的でした。

信仰学では、クルアーン・テキストの深読みを構造分析方法により行い、イスラーム到来理由を明確にし、また、法学における自由意思の変更の法定保障などを明らかにしました。

一方、思い出として、現在は実施されていませんが、当初、毎年3月に諸宗教の施設を訪問しての教員研修旅行が行われ、故人となられた野本理事長(当時)から、神学部についていろいろなお話を拝聴しました。また、学生たちも血気盛ん、あるいは人生を直球で問いかける強さがあり、時には夜遅くても研究室をノックするのです。最近の21世紀生まれの学生たちは、

社会全体の問題よりも自己の興味に忠実で、様々な角度から卒論をまとめるようになり、先達たちのテーマを共有することは、あまり見られませんが、

そのような変化の中で、新島襄の良心教育と大学設立の理念、そして、その実践である同志社を意識するようになりました。新島襄全集のPDF(第10巻除く)が公開されましたが、私自身は、紙媒体のものも含めてもっており、今後は、折に触れて開きながら、同志社での経験と照らして読んでいきたいと思っています。

最後に、神学部、先生方、スタッフの皆様、在学生、そして、これから学ばれる学生の方々の益々の発展をお祈り申し上げます。



石川 立先生 ご退職にあたって

神学部長・神学研究科長
小原 克博

石川先生と関谷先生と私は、共に1996年より同志社大学に奉職した「同期」とも言える関係ですが、当時の私は文字通り「新米」であったのに対し、石川先生は私の目には、すでにその道（聖書やその言語）を極めた達人（仙人）のように映っていました。確かな言語理解に基づいて、旧約聖書と新約聖書を縦横無尽に解釈する力をお持ちの石川先生は、細分化が進む時代において、貴重な存在であったと言えます。石川先生の魅力の一つは、自由な発想で聖書解釈の可能性を探究してこられたことです。石川先生の授業「聖書解釈演習」で学生が作った作品を見せてもらったことがありますが、その作品の背後に石川先生の自由で優しい眼差しを感じることができました。



四戸 潤弥先生 ご退職にあたって

神学部長・神学研究科長
小原 克博

神学部が中核となって一神教学際研究センター（CISMOR）を設立し、同センターが21世紀COEプログラム「一神教の学際的研究—文明の共存と安全保障の視点から」（2003～07年度）に採択される中で、新たにイスラーム研究の領域を担っていただく方として、四戸先生を招聘しました。私自身、大学院科目「一神教学際研究演習」を長年、四戸先生と共に担当しただけでなく、CISMORの諸活動を通じてご一緒する機会が多数ありました。エジプト等での国際会議出席のため、長旅を共にすることもあり、そのユニークなお人柄だけでなく、堪能なアラビア語に魅了されました。カタル仕込みのイスラーム法学に関する堅実な知見には、教えられることが多くありました。



神学部・神学研究科の近況報告

神学部長・神学研究科長 小原 克博

2022年度の様子

同志社大学の授業は、大規模クラスをのぞくと、ほとんどが対面授業となり、コロナ以前の状態に戻ってきたと言えます。神学部では対面授業を大切にしながらも、コロナ以前に開始し、また、コロナ禍において発展させてきた、多様な学びのスタイルを今後も維持・発展させていきたいと考えています。同志社科目「建学の精神とキリスト教」に代表される大規模クラスのいくつかはオンデマンド動画を使ったインターネット授業として開講されています。また、神学部が取り組んでいるALL DOSHISHA教育推進プログラム「社会実践のためのブレンディッド・ラーニングの構築—「地の塩」プロジェクト」(2019～2024年度)では、オンデマンド動画、対面授業(アクティブラーニング)、フィールドワークを組み合わせたブレンディッド・ラーニングとして実施されている科目の数を着実に増やしています。教室に来たからには、一方通行で終わることなく、インプットされた学びの成果を自分の言葉でアウトプットし、他者の多様な意見に耳を傾け、自分自身の考えを批判的に振り返ることを通じてこそ、学んだ内容を自分の血肉とすることができます。少人数である神学部の良さを最大限生かして、きめ細かく、質の高い学びの機会を提供したいと考えています。

大学院のクラスは少人数のものが多く、また、多様な背景をもった学生がいることから、オンラインを生かした教育がなされています。遠隔地で生活をしながら、仕事をしながら、学びを続けることができるのも時代の恩恵であると言えるでしょう。2022年度は、こうした新しい学びのスタイルが日常的なものとして、すっかり定着したと言えます。

神学部OCWを公開

2022年から「同志社大学神学部・神学研究科オープンコースウェア(OCW)」(<https://ocw.theo.doshisha.ac.jp>)の運用を開始しました。本OCWでは、同志社大学神学部・神学研究科に関連する講義や講演会などの動画、および資料を公開しています。神学部での学びと知を社会に還元することを目指しています。神学部を希望する受験生に対しては対面での模擬講義に並ぶものとして、積極的に本OCWを活用していただきたいと願っています。実際、2022年度秋の自己推薦入試や推薦選抜入試などの口頭試問の際に、本OCWで神学部の授業を視聴し、関心をもったという受験生が少なからずい

ました。受験生に限らず、教会や一般社会の中で神学に関心ある方も、本OCWを通じて、学びを深めていただくことができます。現在、120以上の動画コンテンツが掲載され、多様な切り口で検索できるようになっていますが、今後、さらに拡充していく予定です。

ALL DOSHISHA 教育推進プログラム

このプログラムには多数の授業が関係していますが、その中でも「宗教と社会福祉」「宗教と社会活動」はこのプログラムのために新規開設された科目として重要な役割を担ってきました。いずれの科目も、オンデマンド学習、教室でのアクティブラーニング、社会福祉関係施設におけるフィールドワークから構成されており、学生がキャンパスの外で多様な出会いと経験をすることができるよう授業設計がなされています。

2022年度はこのプログラムに対する中間評価が行われました。神学のこれまでの様々な取り組みが高く評価され、「A評価」を受けることができました。

こうした実績を踏まえ、学生の学びの領域をさらに広げていくために、2023年度には新たに「宗教と国際社会—バングラデシュで学ぶ国際社会の課題」という科目を開講する予定です。2022年度はその準備のため、勝又先生・木谷先生と共にフィールドワーク先となるバングラデシュに出かけ、現地で学生をサポートしてくれることになるNGO団体デライト・ファウンデーションの活動を視察しました。この団体は、キリスト教の精神に基づいて設立され、本学神学研究科修士の村上渡さんが責任者を務めているものです。この授業では学生が、国際社会が抱える課題を直視し、問題解決の方法を考える力を養うこと、そして、国際社会における宗教の役割を考える力を身につけることを目標としています。来年には、実り豊かな成果報告ができればと願っています。

キリスト教主義学校との関係強化

一昨年度、キリスト教主義学校からの受験生が減少したことを重く受けとめ、2022年度春学期に、同志社大学と協定関係にあるキリスト教主義の高校を対象に、神学部教員が手分けをして高校訪問を行いました。対面で進路指導や宗教科の先生たちと話をし、また、神学部に関心ある高校生たちと交流することにより、神学部への関心を高めてもらうことができました。また、実際に訪問した高校から受験生が出てきて



デライト・ファウンデーションの子どもたちとの遠足(ポートツアー)

おり、一定の手応えを感じています。こうした努力を今後も続けていきたいと考えています。

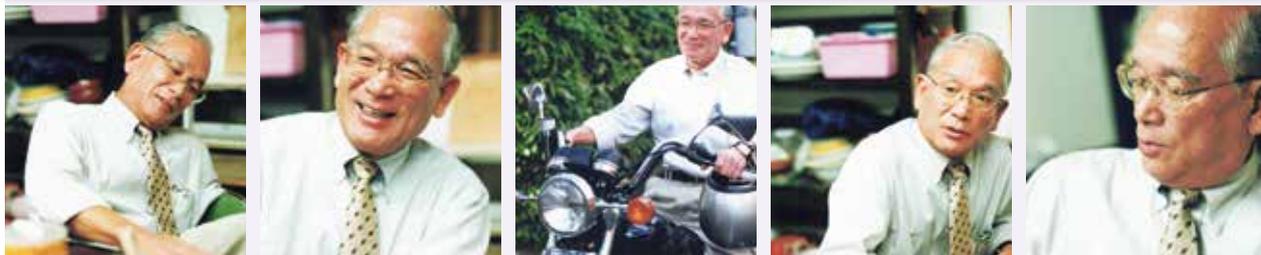
旧統一教会問題への対応 —神学部の魅力を伝える

安部元首相銃撃事件(2022年7月8日)をきっかけとし、カルト問題が大きな社会的関心となり、また、旧統一教会と保守系議員との癒着の実態から、政治と宗教の関係がクローズアップされることになりました。私は、この事件をきっかけに各種メディアから取材を受けることになりましたが、その中で痛切に感じたのは、取材する記者が宗教や政教分離・信教の自由に対する基本的な理解を欠いていることでした。

かつてオウム真理教の一連の事件が起こった後、宗教全般に対するネガティブな見方(宗教は危ない、怖い)が社会に広がっていったことを思い起こすと、今回の件で、キリスト教が誤解されることのないよう、なるべく丁寧かつ慎重に情報発信していく必要があると考えています。様々な情報や議論が錯綜する中、時局に流されることなく、本質的な問いを投げかけ、宗教リテラシーの必要性を訴えながら、同志社大学神学部への関心喚起へとつなげていくことができればと心密かに願っています。

このテーマに関連して神学部への取材もありました。NHK「ハートネットTV」(2023年2月14日放送)では、神学部のゼミ風景の撮影や学生に対するインタビューがなされました。また、旧統一教会問題と関係はありませんが、同志社礼拝堂を探訪した関西テレビ「兵藤大樹の今昔さんぽ」(報道RUNNER、2022年12月23日放送)でも、神学部学生に対するインタビューがなされ、大きな反響がありました。宗教に対する誤解や偏見が強まる中、適切かつ積極的に情報発信をすることにより、神学部の魅力を世に伝えていきたいと考えています。

深田未来生先生の思い出



関谷 直人 「いこいの深田研究室」

深田先生は1933年5月10日にお生まれになり、2022年6月25日に神様のもとへお帰りになりました。先生は1960年ボストン大学神学部修士課程を修了され、1960年9月にアメリカ合同メソジスト教会の宣教師として同志社香里高校の教員となられました。1966年に同志社大学神学部の専任講師に就任され、その後2004年3月末でご退職されるまで神学部の実践神学の教授として、説教や臨床牧会学を中心に神学教育に携わってこられました。

現在、神学部の実践神学の教員である私にとっては、深田先生は実践神学の同僚であったわけですが、先生は最後まで「私の先生」でした。自分が神学部の学生時代にとっていた説教や臨床牧会訓練を指導して下さった深田先生の、ユーモアを交え、しばしば熱く指導をされるその姿が私の中でずっと変わらない「深田先生」だったので、初対

面の方でもすぐに10年来の友達であるかのように接して下さいました。そんな先生でしたから、神学館4階の階段をあがったすぐのところにあった先生の研究室（現在は合同研究室になっています）には、いつも多くの学生さんが入り浸っておられました。ただ「深田研究室」の魅力は、それだけでなく、多くの学生さんが深田先生の部屋に常に用意されていた様々な種類の「おやつ」に惹かれてやってきたことも事実であったと思います。先生は大抵部屋の奥に置かれていた仕事机に向かって何かしら仕事をしておられ、学生たちは入り口近くの立派なテーブル（このテーブルの来歴については深田先生から一度伺ったことがあったのですが、忘れてしまいました）を囲んで、特に深田先生の許可を得ることもなく、各自お茶を入れ、思い思いにおやつをいただいていたように思います。深田先生は忙しいときには「なんだ！忙しいんだ！帰れ！」とか奥

から叫ばれるのですが、私などもほとんど意にも介さず長時間そこに居座っていました（一度和歌山の『はちみつ梅干し』を私が一人でパクパク食べたときだけは本気で怒られました）。でも、あの部屋があって、あの深田先生の圧倒的な包容力に出会わなければ、後に牧師として立つことができなかった学生さんは大勢おられたのではないかと思います。

アメリカに帰られた深田先生が体調を崩され、いよいよ亡くなるとうすとうすに、先生はご家族に向かって「良い人生だった」と声をかけられ、少しあって、はにかみながら「ちょっとくさかったかな」とつぶやかれたと伺いました。なんとも深田先生らしい逝き方でした。ダンディでシャイで、時々熱い深田先生を失った日本の教会、そして、神学部はずいぶん寂しくなりますが、先生が私たちに残していかれたものをしっかりと引き継いでいきたいと思います。

招いて下さいました。親姉姉と離れていても寂しくありませんでした。私たちが遣わされた教会にも駆けつけて下さり、教会員の皆さんと語り合い食卓を囲む交わりを楽しまれました。連れ合いの在日大韓基督教会川崎教会牧師委任式に際し、「二人は食卓を囲む方々なのです。それは主の晩餐を覚える聖餐の食卓から始まって、うれしい時、悲しい時に心も体も癒やす食卓まで、ご馳走があってもなくても日常的なことなのです。（中略）協力して人間が大切にされる地域社会が実現しますようにと祈っています」と祝辞を寄せて下さいました。先生に出会わせて下さった神さまに感謝し、先生との親しい交わりに感謝し、開かれた食卓を大切にしたいと願っています。

鄭 富京 (1997年3月卒業) 「先生に出会わせて下さった神さまに感謝」

私は1993年に留学生として神学部に入りました。1年の授業に、赤いセーターを着て前列の机に腰掛け関東弁で講義する先生がおられました。深田未来生先生でした。強烈な印象でした。3年で先生の授業を履修し発表について相談に行った時、「お、富京、どうしたの？」と笑顔で迎えて下さり、名前を覚えて下さったことがうれしかったです。先生の授業で「京都韓国学園の歩み」について学んだことがきっかけで、東九条と出会い、在日コリアンの苦しみや痛みを知り、「朝鮮基督教会」を研究テーマとし、日本基督教団の教師になる道へと繋がりました。今の自分があるのは、先生の授業で人と人とかかわり、そのかわりがさらなるかわりへと広がり、一人ひ

とりが結ばれる時、平和への一歩を歩み出せることを学んだからです。

その頃、上賀茂伝道所（現・京都上賀茂教会）の礼拝に出席するようになり、先生の退職後は夫婦で宣教師館でもある教会に住まわせていただきました。息子が最初に覚えた言葉が「シェンシェ」であるほど、先生は私たちにとって近い存在でした。息子は高校一年の時に強く希望して、先生に洗礼式の司式をしていただきました。先生は恩師であるだけでなく、故郷を離れて生活している私たちにとって家族でした。先生は私たちを神の家族として「親しい友人」「同志・同労者」と呼んで下さいました。

先生は食卓を囲むことを大切にされまして。クリスマスやお正月などよく食事に

で行ってもらったりと楽しい時を過ごしました。

深田先生は、「僕は自由な生き方をしているように思われることがあるけど、そうでもないんだよ。これでも結構大変なことは多かったんだよ」と度々おっしゃっていました。困難の多い人生を歩まれたからこそユーモアを忘れずに、弱く小さな者の思いをしっかりと受け止める生き方をされて来られたのだと思います。イエスを模範とし、神様に捕らえられ、神様に従う生き様を追い求め続けておられたのではないのでしょうか。

今はゆっくりと、神さまのもとで、先に天に召された方たちと楽しく語りあっておられるに違いありません。

生田 香緒里 (2001年3月修了) 「牧師のカウンセラー」

深田先生と初めてお会いしたのは神学館4階の研究室です。私は同志社女子大学の3年生で、宗教部主催のリトリート講師である深田先生にご挨拶に伺いました。キリスト教の牧師のイメージとはちょっと違うという第一印象でした。気さくな人柄で、どんな人も受け入れる姿勢は、私もそうありたいと思わせるものでした。深田先生の研究室を度々訪ねましたが、いつもにこやかに接して下さいました。

私は大学卒業後、国語科の教員をしていましたが、もっと学んで視野を広げたいと神学部に編入しました。人生の方向転換にあたり、どの道を選ぶか迷いましたが、深田先生の存在は大きかったです。

す。説教や臨床牧会訓練、教育実習に関わる授業、人権教育など多くを学びました。社会の中で大変な思いをしている人々に共感し、共に苦しみ悩む等身大の深田先生を知る機会でもありました。

個人的な話もいろいろとお聞きました。自由学園時代のこと、なぜかよくわからないままに退学になったこと、アメリカでの学校生活やご家族のこと。キリスト教学校で働くということ、牧師としてどうあるべきか、聖書をどう語るかについても多くを示され、どう生きていくべきか考える機会を与えられました。困ったり悩んだりした時にはいつも手を差し伸べて下さり、時には父親のように、一緒にご飯を食べたり遊びに連れ

研究・学術交流

一神教学際研究センター (CISMOR)は、同志社大学神学部の教授たちによって、2003年に設立されました。当センターでは、一神教世界について学際的で総合的な研究・教育活動を行い、研究成果を世界に向けて発信しています。2022年4月には、慶應義塾大学政策・メディア研究科で博士号を取得し、イスラームにおける「悲しみとの向き合い方」について主に啓典解釈学の観点から研究している兼定愛氏と、聖書解釈学が専門で同志社大学神学研究科で博士号を取得した鍵谷秀之（本報告執筆者）が、特別研究員としてCISMORに就任しました。以下に、2022年度の活動の中からいくつかピックアップしてご紹介します。

今年度は、CISMOR一神教学際研究会を2度開催しました。本研究会は、若手研究者に発表の機会を提供し、専門家によるフィードバックを通して、研究者の育成を図ることを目的としています。今年度第1回目、5月14日（土）の研究会では、同志社大学神学研究科大学院生1名、CISMOR特別研究員2名の計3名が発表しました。発表は、アラブ世界の現代的説教師現象と大衆向けイスラーム書籍について、聖書解釈学的見地から見たヨハネ福音書3章5節の解釈について、そして、クリスチャン・シオニズム (Christian Zionism) とメシアニック・ユダイズム (Messianic Judaism) の関係史についてという、三つの一神教にまたがる内容で、当センターらしい学際的な研究会となりました。また、第2回目、11月12日（土）の一神教学際研究会では、ルードヴィッヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン福音主義学科大学院生1名、同志社大学神学研究科大学院生3名の計4名が発表しました。発表は、ルカ文書における悪魔論について、古代メソポタミアにおける王権の表象としての玉座について、坂田祐のキリスト教主義教育について、『辨学章疏』における徐光啓の護教論についてでした。各発表の後には、コメンテーターから詳細かつ建設的な指摘や助言などが提示され、発表者とコメンテーターとの間で活発な質疑応答も行われました。若手研究者による今後の活躍が期待されます。



(CISMOR Young Scholars' Workshop 2022-2)

2022年10月30日（日）には、兼定愛氏（CISMOR特別研究員）企画のCISMORリサーチフェロー研究会（啓典解釈研究セミナー）が、「クルアーンの理解と解釈：古典期ウラマーの実践を中心に」というテーマのもと開催されました。大川玲子先生（明治学院大学国際学部教授）から「クルアーンにおける『天の書』関連句をめぐる解釈の展開」、また、竹田敏之先生（立命館大学立命館アジア・日本研究機構准教授）から「クルアーン読誦学とアラビア語正書法の展開：ラスム学の5原理とその主要著作」というタイトルでご講演いただきました。ご講演後には、16名の参加者から、ユダヤ教、キリスト教、イスラームといった各人の専門領域に基づく質問とコメントが提示され、有意義な議論が行われました。



(CISMORリサーチフェロー研究会(啓典解釈研究セミナー))

2023年1月14日（土）には、CISMORと韓国 The Institute of Korean Theological Information Network Service（韓国神学情報ネットワークサービス、IKTINOS）による国際ワークショップが開催されました。IKTINOSとのワークショップは、今年で第2回目となりました。今回のワークショップのテーマは、「Purity Laws in Contexts: From the Ancient World to Modern Times」で、韓国側から4名、日本側からは、アダ・タガー・コヘン氏（同志社大学神学部教授、CISMORセンター長）、北村徹氏（同志社大学神学部嘱託講師、CISMORリサーチフェロー）、大澤香氏（神戸女学院大学文学部総合文化学科准教授、CISMORリサーチフェロー）、前川裕氏（関西学院大学理学部准教授）の4名により発表が行われ、35名の参加者による活発な質疑応答がそれに続きました。CISMORとIKTINOSの学術提携が今後も進展し、日本と韓国における神学研究の交流がますます活発化することが期待されます。



(Workshop with IKTINOS)

以上取り上げた活動以外にも、当センターでは研究会や公開講演会を数多く開催し、CISMOR VOICE（ニュースレター 年2回発行）でその概要を紹介しています。また、若手研究者向けに『一神教世界』、博士号取得者向けに『一神教学際研究』という学術誌を毎年刊行する他、各研究会のプロシーディングスを刊行しております。

(CISMOR事務局 鍵谷秀之)

公開講演会

小原 克博

公開シンポジウム「戦争と同志社」報告

2022年5月6日、神学館礼拝堂とZoomウェビナーのハイブリッド形式で神学部・神学研究科主催公開シンポジウム「戦争と同志社—有賀鐵太郎の時代から現代まで」を開催しました。ウクライナ危機によって世界の緊張が高まる中、戦争のリアリティをより多面的に受けとめるため、本シンポジウムは、私たちの足元の歴史を見つめ直し、過去と現在の戦争のリアルをつなぐことを目的として企画されました。そのために、戦時下の同志社を知る、カナダ在住の有賀誠一氏（本学・工学部卒業生、カナダ合同教会引退牧師）を講師として招き（オンライン登壇）、同氏の父・有賀鐵太郎（戦時下、本学神学科教授）の生き様や思想に触れることによって、同志社や神学部が戦争とどのように向き合ったのかに迫っていきたいと考えました。

講演では、終戦前後のキャンパスの様子（塹壕が掘られていた）や、食糧難のため、教職員に岩倉や今出川テニスコートの空き地が提供され、それらを開墾して農作物を得ていたことなどが紹介されると同時に、戦時下の総長たち（湯浅八郎、牧野虎治）や有賀鐵太郎をはじめとする同志社人たちが妥協と忍従

の中で、多くの犠牲を払いながら、何を守ろうとしてきたのかが問われました。戦後、有賀鐵太郎を批判する者もいたようですが、没後25年記念追悼会での元神学生の証言「私たちが非難の声を上げても、有賀先生は一言の弁解もされず、皆の前に両手をつけて、『すまなかった。本当にすまなかった』と涙を流されました。私たちも一緒に泣きました」は、一教員の慚愧の念を越えて、戦後同志社が向き合わなければならない課題をも示しているようでした。講演終盤では、戦時下の同志社および日本の問題を現在のウクライナ危機と関連付けながら、平和主義や「真誠の愛」（新島襄の遺言）の重要性が説かれました。

有賀氏の講演に続き、吉田 亮・社会学部教授からコメントをいただきました。吉田氏は、戦後の日本社会（クリスチャンを含む）では、戦争協力

に対する十分な反省がないままに、犠牲者としてのスタンスを示す者が少なくなかったことを指摘しながら、そうした状況の中で有賀鐵太郎はどうであったのかを問われました。吉田氏のコメントに対し、講師の有賀氏から応答していただいた後、会場およびオンラインから質問を受け付けました。多くの方が、現在のウクライナ危機への対応に関する質問をされ、質疑応答を通じて、再度、過去の戦争と現在の戦争を関係づけながら、我々自身の課題を確認することができました。本シンポジウムの動画は神学部OCWでご覧いただくことができます。



新入生キャンプを振り返って

石川 菜緒（学部4年次生）

新入生キャンプリーダーとして

「新しい環境へと足を踏み出す新入生の不安を軽くしたい」という想いから、私は新入生キャンプのスタッフを務めることになりました。

数少ない学部生が一堂に会するこの機会は、オンライン授業が取り入れられるようになった状況の中でより貴重な交流の場となりました。そのような場の進行をスタッフとして行うことは、もう3度目であり段々と慣れつつありました。更に、今年はリーダーという重大な役割も頂くこととなりましたが、特に問題無く円滑に当日を迎えることができました。

そのように振り返られたら良かったのですが、何年やってもイベントの計画・実行は難しいことであると痛感しました。なぜなら新型コロナウイルスの感染状況に伴い、毎年イベントの行われ方も異なっていたからです。

私が新入生の頃に参加した時は、一泊二日の合宿を兼ねたものでした。寝食を共にすることによって、レクレーションだけでは得ることのできない団結力が生まれたと実感していました。しか

し、その次の年は新型コロナウイルスが国内で流行り始めた時期と重なりました。そこで初めてのオンライン開催となり、手探りの状況で準備を進めることとなりました。当日は、長時間にわたってパソコンの画面の前に座り続けることになり、達成感と疲労感に襲われていた記憶があります。次の年から感染状況も落ち着き、ようやく対面での開催が可能となりました。

このように去年の反省点を活かす以前に、そもそも実施方法という大きな前提が異なっている点に困惑を覚えました。また、自分は元々リーダーとして集団を先導するよりもチームメイトとして周りを支える方に得意さを感じていました。

しかし、弱音ばかり吐いてもいられないため何とか就職活動と並行しながらも努力をしました。その上で、支え続けてくれた副リーダーや、自主的に働いてくれた他のス

タッフには大きく助けられました。引っ張っていくような理想のリーダー像ではないながらも、他者の協力とともに同じゴールへと向かって進んでいったのではないかと思います。

そのように、スタッフや先生方の多くの努力が積み重なって出来上がった今年の新入生キャンプでした。来年もまた、イベントの実施方法等変更点があるかもしれませんが、スタッフ同士のチーム力をもとに素敵な新入生キャンプとなることを卒業生として祈っています。



「地の塩」プロジェクト

勝又 悦子

コロナの心配も続く中、「地の塩」プロジェクトは4年目を迎えました。春学期には「宗教と社会活動」を開講しました。フィールド・ワーク（以下FW）の受け入れ先のバザール・カフェでは、教員も含め全員で訪れ、バザール・カフェの経緯をしっかり学ぶ機会を得ました。また、伏見区の障がい者福祉施設あいりんデイサービス・センターでも合同FWを行いました。その後、各自で、バザール・カフェ、あいりんデイサービス・センター、野宿の方を支援するきょうと夜回りの会でのFWを進めています。全体報告会ではそれぞれの視点からの意見が交換されました。学生自身が色々なハンディを乗り越え、積極的にFWに取り組む姿に学ばされました。

秋学期「宗教と社会福祉」の開講は、今年度も直前まで迷いました。しかし、今年度は、止揚学園を基軸に、本学とのつながりも深い福祉法人同胞会イサク事業所（宇治市）、さらに、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンのご協力も得て、開講に踏み切りました。イサク事業所では、通所の就労施設で障がいのある方たちとお菓子作り、食事作り、清掃、農作業に参加しました。福祉施設でのFWが初めての学生も、自らコミュニケーションを取ろうと模索しながら取り組みました。皆さんが得意なことを生かしながら仕事をしている様子、スタッフさんが適切なサポートで支えているっしやる様子を身をもって学んだようです。

また、12月には、東九条にある京都市地域・多文化交流ネットワークサロンに合同FWで訪れ、この地に長く暮らしてきた在日のみなさんの歴史、これからのまちづくりについて、誰もがふらっと訪れることの

できるカフェほっこりについて、それぞれ詳細なレクチャーを伺いました。レクチャーの後には、かつて四ヶ町、四〇番地と呼ばれた地域を、案内を受けながら見学しました。かなりの距離を歩きましたが、実際に自分の脚で歩いて見ると、京都駅のすぐ近くであるのに私たちが知らなかった歴史の跡、時間が止まったような空間、同時に今から動き出そうとしているこの町の力強さを感じ取ることができました。

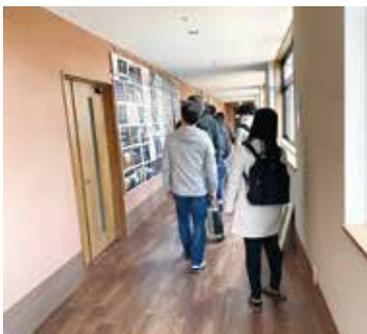
止揚学園では、感染対策も考え一泊二日の体制でフィールド・ワークを受け入れて頂きました。宿泊を伴うフィールド・ワークは初年度には想像もしなかった形です。コロナ禍だからこそ考え出された形であり、学生も深く止揚学園での活動に関わることができたのではないのでしょうか。学生は、障がいのある仲間のみなさんの入浴のお手伝いや、クリスマスツリーの飾り付けなどを通して、人と人のつながりの温かみ、自分が仲間のみなさんに受け入れられているということを感じ、そして、職員のみなさんともじっくりお話を聞く機会をえることができました。人生観が変わったという報告もありました。

1月26日には、全体報告会をいたしました。止揚学園から福井園長先生、東館容子さん、また、来年度「宗教と国際社会」でお世話になるデライト・ファウンデーションの村上渡先生もお越し下さいました。この会がまた素晴らしかったです。学生は、きちんとまとめた報告をしてくれました。コロナ禍で入学して以来、初めて人と触れ合う体験ができた、FWの前後で親御さんから自分が変わったという指摘を受けた、FWと一緒にいった仲間同志でそのあとずっと話し込んだ、FW後は、自分の本当の気持ちを出すよ

うにしたなどなど、色々な形でこの学びが響いているんだということを感じ、本当に嬉しくなりました。福井園長先生は、「信仰によってはじめて人は生かされる」「どんな命も平等なのだ」ということをお話されました。この授業の、また、ひいては神学部の学びの真髄に触れるお言葉であったと思います。また、村上先生からも今後「隣人」に対してどのように接するかということが大きな宿題として出されました。これらの言葉を胸に、まずは、「知る」というところから初めて、歩みを続けて参りたいと思います。

ALL DOSHISHA 教育推進プログラムの採択期間も折り返しを迎え、6月には中間評価が行われました。入念に準備を重ね、中間評価審査に臨んだ結果、コロナ禍であってもできることを着実にやり遂げたこと、様々な学びを融合したブレンディッド・ラーニングを聴講生制度、神学部・神学研究科OCW（オープンコースウェア）へと発展させたことなどが高く評価され、A評価を頂くことができました!!さらにこの学びの教育効果の測定が期待されています。

来年度は、「宗教と国際社会」にて「地の塩」プロジェクトは、地球レベルで展開します。神学部・神学研究科OCWでも神学部のオンデマンド授業を随時追加しております。新入生の入学前学習にも活用します。皆様もご視聴できますので、ぜひご覧ください。引き続き、「地の塩」プロジェクトFacebookで情報を発信しております。直近の『同志社時報』（2022年10月号）でも紹介しました。また「宗教と社会福祉2022」の報告書も作成予定です。OCW Facebookには、以下のQRコードからアクセスできます。



あいりんデイサービス・センター見学



京都市地域・多文化交流ネットワークサロンにて、東九条の歴史・今・未来について学びました。



京都コリアン生活センターエルファ前にて



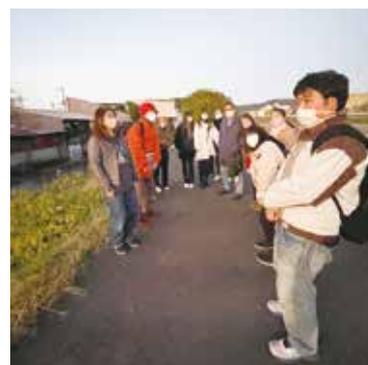
全体報告会にて止揚学園福井生園長先生からのメッセージ



神学部・神学研究科 OCW QRコード



地の塩プロジェクト Facebook QRコード



東九条の街並みを実際に歩いて学びました。鴨川をバックにして。

お知らせ

●2022年度卒業・修了生

・学部	46名
・大学院博士課程(前期課程)	9名

●2022年度入学者

(1)学部第1年次生	64名
(2)学部第3年次生	1名
(3)大学院博士課程(前期課程)	
神学専攻	8名
(内社会人特別入試合格者1名)	
(4)大学院博士課程(後期課程)	
神学専攻	3名
(内社会人特別入試合格者1名)	

◆2023年度 神学部・神学研究科役職者

学部長・研究科長	小原 克博
教務主任	勝又 悦子
教務(国際)主任	関谷 直人
教務(入学)主任	森山 央朗
大学院教務主任	村上 みか
	越後屋 朗
学生主任	木谷 佳楠
研究主任	村山 盛葦

新社会人になって



田川 智香子
(2020年3月卒業)

新社会人になり、市役所の福祉専門職として働いています。福祉専門職は、

「福祉の現場から」

児童相談所や福祉事務所で働きます。私の現在の業務は生活保護のケースワーカーです。業務には複雑で膨大な社会保障制度の知識が必要です。加えて担当しているケースは100世帯以上あり、毎日が試練の連続です。過酷な人生経験がある方への支援は非常に繊細さが求められます。貧困が心を貧しくさせるゆえ、受給者の怒りの矛先がケースワーカーになることも多くあります。一方で、訪問先で波瀾万丈な昔話などを聞かせてもらい、心がほっこりする瞬間もあります。慌ただしい日々ですが、生活

保護という福祉の最前線で働くことにやりがいを感じています。

私が、福祉の道を志すきっかけは神学部にありました。特に、「宗教と社会福祉」の授業を受け、将来は福祉の仕事がしたい!と思うようになりました。また、神学部には社会活動に携わる人が多く、教会奉仕やボランティアの話が友人から聞いたことも刺激になりました。神学部には、地の塩と呼ばれた偉大な社会活動家や先輩がたくさんいますが、私は福祉の現場で活躍できるよう頑張ります。

新社会人になって



原田 棕
(2022年3月卒業)

2022年3月に神学部を卒業し、私は母校であるヴォーリズ学園近江兄弟社高

「いのち」 キリスト教教育と共に学ぶ

等学校で聖書科の常勤講師として働いています。滋賀県の自然に包まれながら生徒の皆さんと学びを育んでいます。

担当は高校3年生15クラスへの聖書授業、宗教委員会、ヴォーリズ・キリスト教平和センター、聖書研究会顧問、生徒会執行部顧問です。中でも力を入れて取り組んでいることは、「いのち」を大切にすることは何かを聖書から学ぶキリスト教倫理、一神教や多神教などを多角的に学び国際的な視野を広げる目的の授業です。

自分は教師としてまだまだ未熟であると痛感することが多いですが、生徒のみ

なさんと共に学び、共に成長し、共に生きていることを実感しています。そして恩師に見守られながら、「相談できる」「居場所がある」環境に感謝致します。教材研究や業務に追われながらも楽しみながら働くことができています。

また、同志社大学在学時から参加している「きょうと夜まわりの会」も毎週続けています。命と居場所の確保の困難さに直面しています。毎年、中高生による路上生活者への加害事件が起きています。いのちの重みを伝え、中高生の背景にも目を向け、心に寄り添うことのできる教師になります。

事務室からのお知らせ

いつも『同神期報』をご講読いただきまして、ありがとうございます。

現在、神学部・神学研究科事務室にて『同神期報』を講読して下さっている方の住所管理を行っております。

ご住所・お名前の変更、講読に関するお問い合わせ等ございましたら神学部・神学研究科事務室までご連絡ください。

なお、次号以降の講読を希望されない場合は **5月31日(水)まで** に神学部・神学研究科事務室まで FAX または E-mail にてご連絡をお願いいたします。

同志社大学 神学部・神学研究科事務室 FAX: 075-251-3072 E-mail: ji-sinjim@mail.doshisha.ac.jp

2022年度 大学院博士課程（前期課程）修了者論文題

一神教学際研究

- 浅野 けやき サムエル記下 14 章 1-20 節におけるחכמה אשהについての一考察
高木 俊明 十二イマーム派の神学者シャイフ・ムフィードにおける最益説についての考察
—最益説における一個人とそれ以外の他の人々の位置づけ—

歴史神学研究

- 崔 成洙 織田樞次の信仰と活動 —自叙伝に見る朝鮮伝道の歴史—

組織神学研究

- 吉村 厚信 臨床宗教師の役割とスピリチュアルケアの必要性について
—人生の終末期における宗教間対話を通じて—

- 石川 ゆりな シモーヌ・ヴェイユの「隣人愛」から考察するケアの倫理
山脇 絳奈乃 現代日本の死生観に関する一考察 —葬送の変化を中心に—

実践神学研究

- 佐塚 琴音 ヨゼフ・ルクル・フロマートカの無神論理解 —実践を基盤としたキリスト論についての一考察—
後宮 嗣 グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた牧師のオンライン礼拝への取り組みに関する研究
村山 直樹 牧師疲弊についての研究

2022年度卒業論文のなかから

- 日本におけるバルト神学受容史 —同志社・村上俊の場合—
- 日本基督同胞教会における circuit system の消失に関する一考察 —日本メソヂスト教会の統治体系との比較から—
- ヨハネ福音書 7:53-8:11 (Pericope Adulterae) におけるイエス像の一考察 —ヨハネ 8:7b を中心に—
- ラクダの戦いと教友の権威 —シャイフ・ムフィード『ラクダ』の考察—
- 宗教儀礼の回帰性に関する一考察
- 消費主義文化とキリスト教 —ファッション消費に対する神学的・倫理的応答—
- マンガにおける身体性：<記号><人><神>へ —『仮面ライダー』における描写法に関する分析—
- ディズニー映画における宗教的価値観の時代的変遷 —長編アニメーション版と実写版作品の比較を中心に—
- 和風教会建築のインカルチュレーション —日本聖公会奈良基督教会を例に—
- 宗教および動物観から見る肉食主義に関する一考察
- 古代末期思想における Providens と靈魂の自由
- 16世紀ルター派による東方正教会との対話 —その歴史的、神学的意義の考察—
- 食とジェンダー —食卓の多様性から共生を考える—
- 千提寺・下音羽キリシタンについての一考察 —1920年にキリシタン遺物が発見されるまで—
- 実践神学的視座から見たパンデミック後の教会の課題 —京都市内の同信会系教会を中心に—

2023年度 入学試験 志願者・合格者数一覧表

	募集人数	志願者数	合格者数
推薦選抜入学試験	14名	37名	14名
自己推薦入学試験	6名	39名	7名
キリスト教主義学校の連携ネットワーク 推薦入学試験	5名	4名	4名
法人内諸学校推薦入学試験	5名	5名	5名
外国人留学生入学試験	若干名	2名	0名
一般選抜入学試験	31名	296名	84名
大学入学共通テストを利用する入学試験	2名	30名	7名
第3年次転入学・編入学試験	若干名	5名	2名
神学研究科 博士課程（前期課程）入学試験	春秋合計20名	10名	7名
神学研究科 博士課程（前期課程） 社会人特別選抜入学試験	若干名	3名	2名
神学研究科 博士課程（前期課程） 外国人留学生入学試験	若干名	1名	1名
神学研究科 博士課程（後期課程） 入学試験（春期実施）	5名	7名	1名
神学研究科 博士課程（後期課程） 社会人特別選抜入学試験（春期実施）	若干名	1名	0名
神学研究科 博士課程（後期課程） 外国人留学生入学試験	若干名	1名	0名

教会等赴任者 2023.3.1現在

この春、1名の方が伝道師として巣立って
いきます。

後宮 嗣(日本基督教団 世光教会)

2021年度【神学部】主な就職先

みずほ証券株式会社
株式会社大和証券グループ本社
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
株式会社紀陽銀行
富士通Japan株式会社
住友電装株式会社
TOTO株式会社
株式会社ニッコー
楽天グループ株式会社
株式会社TASAKI
株式会社イトーヨーカ堂
総合警備保障株式会社
マンパワーグループ株式会社
SOMPOケア株式会社
国立大学法人京都大学
学校法人ヴェーリズ学園

STAFF ROOM

研究室から

アダ・タガー・コヘン

新型コロナウイルスのパンデミックに関連する規制が今年度2022年に解除され、私たちは大学キャンパスに喜んで戻ってまいりました。

今年度は、私にとってとても実りの多い一年でした。CISMOR (一神教学際研究センター) では、オンラインでワークショップや講演会を多数実施し、活発に活動しました。本ニュースレターでは、IKTINOSのメンバーである韓国人クリスチャンたちと我々のセッションについても紹介されていますので、ご参照ください。また、今年度は、CISMORにおける主要なワークショップのいくつかが出版されます。この度、『CISMORユダヤ学会議 第11号』(CJS11)が発行され、CISMORのホームページ上で公開される運びとなりましたことをお知らせいたします。

今年度は旅行をすることもでき、夏には3年ぶりにイスラエルの家族に会うことができ、幸せでした。この年を無事に、そして、健康に終えることができ、うれしく思います。

越後屋 朗

入社して、この3月末で丸31年となります。飽きやすい性格なのに、よく続いてきたと思います。いぶし銀の輝き!といたるところですが、2022年度は体調および精神的にも最悪でした。慣れているはずなのに、オンライン授業の準備はまさに苦痛そのものでした。あと1年、何とかやれたらと思っているところです。

「創世記1章1節-2章3節と出エジプト記3章における動詞h-y-h」というタイトルの私の文章(論文未滿)が入った『「ナル的表現」をめぐる通言語的研究—認知言語学と哲学を視野に入れて—』が近々出版されるようです。他に、ダビデについての一般向けの英語本を訳しています。そろそろ終わりますが、出版となるかどうかはわかりません。

石川 立

2022年12月、カタールで開催されたサッカーW杯に世界は大いに盛り上がりました。その舞台に立ったメンバーの中には、戦火の止むことを知らないウクライナ

や、深刻な問題を内に抱えた国々のチームがあったことも忘れるわけにはいきません。とりわけ、この大会の陰で、多くの外国人労働者の命が犠牲になったことも記憶にとどめておきたい。そのことを踏まえながらも、優勝決定戦のフランスとアルゼンチンの戦いは胸を打つものがありました。この興奮のなかで、わが家のネコはメッシと改名されました。(因みに、旧名「ネコ」は、列王記下23章29-35節に出るファオオの名に由来します)

ところで1月18日、私は最終講義を無事終了しました。大学という組織の中にあること自体が私には戦いでした。激戦の末、同点で終わり、PK戦で辛うじて勝敗を分けるあたり、私の人生と似ているなあ(?)。メッシもA代表からは引退する由。どこか私に通じるところがあるなあ(?)。

勝又 悦子

元々研究室のあった待辰館の耐震工事のため、神学館に仮住まいしておりましたが、このまま居座らせて頂くことになりました。神学館の先生方よろしく願います。「地の塩」プロジェクトでは、春学期に「宗教と社会活動」、秋学期に「宗教と社会福祉」を敢行できました。関係各所の皆様に感謝申し上げます。夏には来年度の「宗教と国際社会」のための視察で、小原学部長、木谷先生とともにバングラデシュへ。子どもたちの可愛いこと。また、12月の東九条でのフィールド・ワークも貴重な体験でした。研究では、7月に『宗教研究』に論文掲載、昨年の巨人シンポジウムの報告書を目下、校正中。1月末に、恩師市川裕先生とJ.リュブケ先生(独エアフルト大学)共催のZoom研究会で、ラビ・ユダヤ教の「穢れ」の世界観について報告。子育ても少し落ち着いてきたので、かつて興じたバドミントンを復活させようとしたら、たちまち膝を痛めてしまい、ああ、私の人生って・・・という感じです(泣)。

木谷 佳楠

昨年の5月に若王子の同志社墓地へ野本真也先生の納骨をしに行ってきました。同じ日にクラウス・シュベネマン先生の納骨もありました。6月には深田未来生先生が天に召され、かつて神学部で教えを受

けた先生方が、ひとりまたひとりといなくなってしまうことに寂しさを感じています。深田先生は昨年2月まで私が説教をする度にコメントを送ってくださり、デリバリーのコツなどについて助言をしてくださいました。昨年1月に木村利人先生と共著で出された『ボクたちは軍国少年だった!』では、深田先生の詳しい生い立ちや、戦争に対してどのようにお考えだったのかということを知ることができます。9月にはドイツのカーlsruエで開催された世界教会協議会(WCC)の第11回総会に出席させていただきました。ウクライナ正教会の代表がロシア側に対話を求めたものの、残念ながら実現しませんでした。エキュメニカル運動の理想と現実との差を実感した瞬間でした。

小原 克博

2022年度は共著として、島藺進編『宗教信仰復興と現代社会』国書刊行会(「プロテスタント—再生と抵抗の原理としての信仰復興運動」執筆)と『徹底討論! 問われる宗教と“カルト”』(NHK出版新書)が刊行されました。後者はNHK「こころの時代」番組(2回分)をまとめたものですが、「近代国家と「犠牲」のシステム」—「国葬」問題の深層」という小論も寄稿しました。NHKでは、旧統一教会との関係で話題となっているテーマを切り分けてシリーズ化するようで、今後も番組出演に協力する予定です。

その他、「現代神学と進化論—感謝と謙虚さの倫理」に向けて(「福音と世界」)、「パンデミックとキリスト教」(「キリスト教史学」)といった論考を著しました。

安倍元首相襲撃事件以降、宗教に関わる報道や議論が活発になされていますが、同時に、宗教に対する偏見や誤解が助長される危うさを感じました。時局に振り回されることなく、政治と宗教の関係等、重要な課題を冷静に考え、同時に宗教を学ぶことの意義を訴え続けていきたいと思っています。各種のメディアの取材や出演に関しては以下のページに情報をまとめています。

https://researchmap.jp/katsuhiko.kohara/media_coverage

三輪 地塩

2022年度も無事に過ごすことが出来ました。皆様からのお支えと励ましに心より感謝いたします。

この一年、所属学会の日本基督教会近畿支部会で幹事、並びに、若手イニシアチブ委員会の末席に加えて頂きました。又、論文『「日本聯合基督教会憲法規則」を巡って』(『教会の神学』(29号))、講演会「アメリカ合同教会の「会衆主義」」のコメントーター、公開講演会「キリシタ

ン研究の現在—キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブームに関する考察」などを行いました。現在の関心は、キリシタン聖遺物についての研究と、明治期～大正期の旧日本基督教会・日本組合基督教会の研究です。

「知りたいこと」「やりたいこと」「究みたいこと」は次々現れてくるのですが、実際に「やれたこと」は少なく、時間の足りなさをもどかしく思う毎日です。2023年は少しでも多くの「知りたい」を追求できる一年でありたいと願うばかりです。

森山 央朗

2022年春、後藤明先生（東京大学名誉教授）の訃報に接しました。私は博士課程の頃から、後藤先生が主導した『預言者ムハンマド伝』をアラビア語原典から翻訳する作業に参加し、多くを学びました。また秋には、人類学におけるイスラーム研究を先導した大塚和夫先生（東京都立大学元教授）の没後10周年シンポジウムが、コロナによる延期を経て開催されました。私は歴史学専攻ですが、修士課程の頃から大塚先生には色々とお世話になり、上記シンポでも少し話す機会をいただきました。自分の研究室では、卒業論文と修士論文各1本の指導（というか、お手伝い）をしました。いずれもアラビア語原典の真摯で批判的な分析に基づいた手堅い好論となり、私も学ぶところが大きかったです。

青取之於藍、而青於藍。出藍之譽を以て師恩に報いることもできぬまま、凡庸な藍になりつつある自分に焦りを感じたりしますが、熱心に学んだ学生・院生が卒業するのは、少々寂しくも晴れがましく思います。

村上 みか

これまで学部や院のゼミで取り入れてきたフィールド・ワークを、今年度はドイツ・テュービンゲンでの授業「ドイツ・キリスト教の歴史と思想」（EUキャンパスプログラム）で実践しました。教室でひと通りの知識を得た後、町に出て、中世の教会やナチズムの痕跡を巡り、ドイツの歴史を体感しました。貴重な学びの機会でした。

その際、足を延ばしてミュンヘン大学神学部のエルケ教授、同神学部長シュツウツケンブルック教授、そして、バーゼル大学神学部時代の指導教授ゲーブラー氏を訪ね、今日の神学やキリスト教について話す機会が与えられました。事柄に即した（sachlich!）豊かな議論を久しぶりに味わうことができ、この上なく幸いなひと時でした。今年からルター研究の国際ジャーナル *Lutherjahrbuch* の編集に携わることになり、優れた神学議論に触れるのを楽しみにしています。11月には日本ルター学会で「『ペスト文書』におけるルターの終末理解」について発表しました。

村山 盛章

2022年度も健康が支えられ無事に終えることができ感謝です。今年も学部の研究主任として『基督教研究』の発行や図書室2階展示コーナーの作成をしました（テーマ：幕末・明治期の聖書翻訳と現在。ホームページで閲覧可能）。研究の方は、洗礼と復活における聖霊の役割についてパウロ書簡に基づいて考察しています。5月には書評「『死と命のメタファ キリスト教贖罪論とその批判に対する聖書学的応答』浅野淳博著」（『本の広場』773号、pp.18-19）を執筆し、改めてキリスト教贖罪論の功罪について考えを深める機会が与えられました。

今年度、大学ではポストコロナを見据えつつ対面授業がメインとなり、久しぶりに学生たちとナマでお話しができ、オンラインでは経験できない学びの喜びを分かち合いました。また、12月には、久しぶりにゼミコンパも行うことができました。ただ、入門クラス（『新約聖書入門1、2』）は、2023年度も完全インターネット授業とし、場所や時間に制約されずに主体的に学ぶ機会を提供します（オンライン聴講制度有り）。

教会関係では、熊本草葉町教会（6月）、阿倍野教会（1月）、八尾教会（1月）において礼拝説教を担当し、また、1泊2日の西日本献身キャンプ（8月）に講師として参加、若き人々と交流を持つことができました。

中野 泰治

2022年度は、17世紀のクエーカーの神学者ロバート・パークレーの組織神学書 *An Apology for the True Christian Divinity*（1678年）の翻訳に専念した年でした。近代英語で書かれた500頁ほどの書物で、ネイティブでも読むのに音を上げる複雑な神学書であるため、翻訳作業には苦労しましたが、何とか形になりそうです。来年度中には新教出版社から出版できるように引き続き作業を頑張りたいと思います。また、今年度は科研費の成果も含む二つの論文「クエーカーの合議形式の特質と民主制における意義—M・P・フォレットの組織論の分析を通して」と「新渡戸と内村の門下生の戦後民主主義教育の可能性と問題点」を『基督教研究』で発表しました。クエーカーの集会は、20世紀初頭の政治学者A・D・リンゼイから英米の民主主義の源流と見なされておりますが、日本の戦後の民主主義も英米型をひな型としたものであるため、研究成果がよい形で私たちの社会に反映できるように努めていきたい所存です。

関谷 直人

2022年度は大学が「脱コロナ」の姿勢を鮮明にした年度でしたが、例えば私が神学館チャペルで、ずっと開講している「ゴスペル」「黒人霊歌」を学びながら実際に歌う、という演習科目は、大学の教室の「コロナ定員」の関係で25名に制限されていて、少し寂しい雰囲気でした。実践神学の担当者としては、学生と一緒にコロナ前までやってきた自主的な「賛美礼拝」なども、2020年以來ずっとできずにいることが気がかりです。ただ一方で、かなりの教会で対面礼拝が実施できるようになり、私もいくつかの教会で礼拝や午後の集会の講師を務める機会が与えられました。11月には、日本基督教団芦屋浜教会で親友の塚本牧師とタッグで行った賛美礼拝、日本基督教団京都丸太町教会での夕礼拝での音楽担当、日本基督教団膳所教会での礼拝担当ならびに午後の音楽集会、東北教区でのハラスメントに関する講演などに招かれました。また、数年ぶりで須磨の愛生園のクリスマスコンサートを対面で行うことができたことは恵まれたことでした。

四戸 潤弥

コロナの2年間のオンライン授業から対面授業に切り替わった年でしたが、この期間に作成したオンライン用講義レジュメと資料を、対面授業を踏まえて修正を加えながら、講義を行なった1年でした。講義レジュメと資料はe-classにアップロードし、学生は学期中、アクセスできる状態にありましたが、学生がどれだけそれらを消化したのか、読んで、ポイントに気づいたのか、そうでなかったのか、理解したのか、そうでないのか、理解して、そこから深めていく準備環境を提供できたのかを、リアクションペーパーも含めて対面授業で確認することが本年度はできました。加えて、板書に重きを置く中学、高校での教授法に馴染んだ学生への配慮がデジタル講義レジュメと資料配布でできた年でもありました。

研究活動について、特に海外研究者との学術交流は制約されたままでしたが、国内では、7月に、拓殖大学イスラーム研究所でのタフスフィール（クルアーン解釈）研究会では、識別の章を、内容としては、信仰実践継続における赦しとの関係性、信仰を受け入れた者への寄進請求権利、宣教活動での拒否する者への責務なし（強制勧誘否定）などの点を中心に発表しました。この数ヶ月後に宗教と献金被害が社会問題化しました。8月には、比叡山の世界平和宗教者会議に参加しました。9月の日本宗教学会では、イスラーム諸国の婚姻法の最初に明記されている、婚約の法定撤回権の構造分析から、イスラーム法が当為でなく紛争解決のシステムの特徴性を持つことを発表しました。

牧会者準備セミナー

全国同信伝道会教職養成部門委員長 加藤俊英

今回で14回目の開催となる「牧会者準備セミナー2023」は2023年2月15日(水)と16日(木)、同志社大学神学部と全国同信伝道会教職養成部門委員会との共催により、同志社大学神学館を会場として行われました。参加者は、経験3年以内の教師12名、牧会志望の学生3名、講師4名、委員7名の合計26名でした。感染症の状況が終息しきらない中、過去2回のセミナーがオンライン開催であったように今回も従来通りのプログラムでの開催は困難でしたが、同志社大学神学館を使用しての2日間のプログラムとし、牧会での現場で感じているであろう課題や思い、悩みといったものを共有することを重視して、今回のプログラムを企画しました。

開会礼拝では、村山盛華先生(同志社大学神学部)によるコリントの信徒への手紙二6章11-13節からの「心を開いて・・・」と題したメッセージによりセミナーがスタートし、続く「主題講演」では講師の山崎道子先生(豊中教会牧師)に「“牧師”らしくないボクシ」と題した講演をしていただきました。ご自分の牧師としてのこれまでの歩みを紹介しながら、そ

の時々直面した出来事の中で、牧師としてどのように考え、何を大切にしてきたかを具体的な事例を挙げながら平易な語り口で語られました。多くの人と事柄との出会いの中で、誠実に精一杯にということ大切に働きの為していると語る先生からの講演は、参加者に共感と励ましを与えるものでした。

宣教の現場で直面するであろう課題に対しての学びの時として「リフレッシュ・セミナー」を持ちました。石川立先生(同志社大学神学部)には「解釈学の話しよう」、森田喜基先生(同志社大学キリスト教文化センター)には「『会衆と共に歩む説教』を考える」、大野高志先生(衣笠病院)には「医療現場に牧師がいること」と題して、それぞれのクラスを担当していただきました。

「現場からの声」では、既に教会で働いている3名がそれぞれの場で感じていることを語り、「全体会」では、「主題講演」や「現場からの声」を踏まえつつ、講師からコメントもいただきつつ、それぞれ



が思いを語り合い、閉会礼拝では西澤他喜衛先生(全国同信伝道会)のヨハネによる福音書10章14-16節からのメッセージによって、それぞれの場へと送り出されました。

3年ぶりに会場に集まった開催となった今回のセミナーは、課題と思いの共有がある程度できたセミナーとなったと思います。このセミナーで得た糧によって、牧会の場での参加者の働きが豊かになることを願っています。



派遣神学生

野村 琴音 (学部2年次生)

派遣神学生として宇治教会で活動しています。主に教会学校での司会や説教、イベントのお手伝いや主日礼拝の週報作成、役員会等の会議の参加、その他教会活動であるトーンチャイムに参加しています。コロナウイルスの影響もあり、例年通りにはいかないこともありましたが、その中でもできることを考え取り組んできました。中でも教会学校でのイベントで夏にはデイキャンプ、秋には愛児園とバザー、大吉山へのハイキング、

冬にはクリスマスイヴ礼拝がありましたが、笑顔あふれる子どもたちに出会うことができたこと、宇治の自然豊かな土地に出会えたことは礼拝に参加するだけでは得られない何よりの財産になったと感じています。また、教会学校での説教を行うにあたり、聖書と向き合う時間ができたことや話を作るという経験からも自身の力不足を痛感することにもなりました。実際に教会運営に携わることで自身の信仰心にも影響が与えられ、今まで以上に真摯に礼拝に参加しようという

気持ちになりました。



河野 いのり (学部3年次生)

昨年、神学部を通して平安教会にて派遣神学生の経験をさせていただいております。クリスチャンホームに育ったため、すでに教会生活はしていたのですが、神学生として教会と関わる機会が与えられ、教会員とはまた違う新鮮な立場で、教会の現場を新たに知ることができました。仕事内容は、週報やその他配布資料の準備、子どもの教会のスタッフ等です。子どもの教会では、礼拝の司会やお話の担当、活動内容の計画など、教会

員のスタッフの方々と共に全般的に関わらせていただいています。私はまだ礼拝の説教をした経験がなく、子どもの礼拝でのお話を考えるたびに、どうしたら子どもたちに興味を持って聞いてもらえるだろうかと悩みます。聖書にあることばを少しでも身近に感じてもらえるよう、自分のこれまでの経験や何か作品に関連づけてみるなど、まだまだ模索中です。また、コロナ禍の世の中ということもあり、教会の方々と直接的な関わりを持つことがなかなかできない点が少しもどかしいです。私に

できることは僅かですが、せつかくの機会に感謝して無駄にしないよう、これからも積極的に取り組んでいこうと思います。



写真は、昨年のクリスマスに子どもの教会のみなさんとトーンチャイムを演奏したときのものです。

神学部公式Twitterアカウント「@STheology_DU」を開設しました。神学部に関する雑多な情報を発信し、本学部に対する社会的認知の拡大を目指します。積極的なフォローと拡散をお願いします。ただし、入試や履修登録などの重要事項については、大学公式サイトなどの確認を怠らないようにしてください。(森山央朗)

